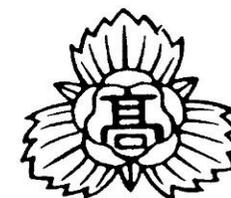


月	入試等日程	学習時間 調査	補習・課外 個別指導	講演会 保護者研修等	進路志望 調査	面談	校外模擬試験		刊行物等	月
							1・2年次	3年次		
4				1年メイフラワーセミナー 2年進路講演会 3年小論文講演会	全年次 第1回		1年スタサポ	小論文模試① (東進マーク)	キャリアパスポート	4
5						面談週間 (全年次)				5
6		全年次 第1回	3年平日補習	3年進路講演会 1・3年次PTA研修会 1年キャリア講演会				進研マーク		6
7			総合型選抜 個別指導開始 ↓ 3年特別補習	大学による校内説明会 (3年小論文講演会) 各大学オープンキャンパス		面談週間 (1・2年次) 3年三者面談	1・2年進研記述	進研記述 (小論文模試②)	進路ニュース	7
8							(外部模擬試験)	(外部模擬試験)		8
9	総合型選抜推薦		3年平日補習	2年キャリア講演会	全年次 第2回			進研マーク	デジタル 進路資料室 の運営	9
10	大学入学 共通テスト 出願	1・2年のみ 第2回	学校推薦型選抜 個別指導開始	2年PTA研修会			1・2年進研記述	進研記述 (東北大オープン) (全統記述)		10
11	学校推薦型選抜			1年PTA研修会		面談週間 (1・2年次)		進研マーク		11
12			3年平日補習			↓ (3年三者面談)		代ゼミプレ		12
1	大学入学 共通テスト	1・2年のみ 第3回	2次試験対策課外 ↓ 前期個別指導	(3年小論文講演会)	1・2年のみ 第3回	3年三者面談	1・2年進研記述	白バック (小論文模試③)		1
2	前期試験		↓ 後期個別指導				2年進研マーク		キャリアパスポート のまとめ 進路ニュース	2
3	前期合格発表 中・後期試験 後期合格発表						(1・2年全統記述) 新2年スタサポ		共通テスト分析集 合格奮戦記公開	3

令和七年度 年間進路指導計画



進路 ニュース

第104号

令和7年7月30日
発行

寒河江高等学校
進路指導課

青は藍より出でて藍より青し

校長 相澤 哲哉

今年の三月に卒業した生徒たちが、単なる合格「体験記」ではない、彼ら自身の合格「奮戦記」を残してくれました。これは、偏差値や順位といった客観的な数字の記録ではなく、生徒一人ひとりが、自分自身とどう向き合い、その困難をどう乗り越えたかを綴った努力の記録です。

第一志望に合格した生徒もいれば、途中で志望校を変更した生徒もいます。一度で合格を勝ち取った生徒もいれば、推薦入試や総合型選抜での不合格を経験し、最後に一般入試で合格を掴んだ生徒もいます。いずれの生徒も、自分との戦いにおける紆余曲折を語り、後輩たちに伝えたいという強い思いが込められています。彼らの文章からは、後に続く寒河江高校の生徒たちへの愛情が感じられました。この奮戦記には、いくつかの共通した特徴が見られました。

一 失敗を成長の糧にする力

生徒たちは皆、自分の失敗と真摯に向き合っていました。模擬試験の答案を徹底的に分析し、「なぜ解けなかったのか」「なぜ間違えたのか」「次回の間違いを防ぐにはどうすればよいか」と自問自答を繰り返し、自分なりの対策を打っていました。また、これまでの学習を振り返り、自身の勉強不足を悔やみ、その挽回に注力する姿が見られました。特に、推薦入試や総合型選抜での不合格経験が、その後の学習や一般入試本番に大きく活かされたと言語する生徒も少なくなかったことは注目に値します。

二 自分に合った学習方法の探求

生徒たちは、自分に合った学習方法を見つけるために、とことん試行錯誤を重ねていました。基礎固めの工夫、参考書の選び方や使い方、授業・教師・塾の活用、オンライン学習、学習時間の確保、スマートフォンや漫画との付き合い方、息抜きやメンタル維持の方法まで、その工夫は多岐にわたります。まずは試してみ、自分に合うか合わないかを分析し、「これだ!」と思える方法に出会ったら、それを徹底的に実行する粘り強さがありました。

三 自分最適な学習環境づくり

生徒たちは、自ら積極的に学習環境を作り出していました。「フロア寒河江学習支援室」のような公共施設、早朝や放課後の学校、自宅の部屋、通学電車の中など、様々な場所を活用していました。そして、それらの学習場所を自分なりに組み合わせ、それぞれの場所で学習する目的や目標を明確にしていたのが印象的でした。

総じて、彼らは自分なりの「唯一無二の学習」を、試行錯誤しながら築き上げていました。この奮戦記に掲載された生徒だけでなく、他の多くの卒業生も、自

分なりの学習方法を見つけようと奮戦したに違いありません。

藍染めは、藍を熟成させて染料を作りますが、染料そのものが青いのではなく、染料から布を引き上げて空気と触れることで徐々に青が姿を現すそうです。卒業生の皆さんには、寒河江高校で苦しみもがきながら体得したことを今後の学業に活かし、良い師を見つけること、時間や手間をかけること、そして自身の成長のための環境を整えることを大切にしてほしいと願うばかりです。「出藍の誉れ」こそが、私たち寒高教師の最大の願いだからです。

『受験の質』

進路指導課長 道上 琢磨

1. 昨年度の受験総括

昨年度は現在の5クラス編成になって以来15年目であった。国公立大学合格者数としては5クラスになった初年度に続き、過去2番目に最多である延べ87名の好成績となった。難関大学である東北大学に2名をはじめ、電気通信大学1名、金沢大学1名、宇都宮大学2名、奈良女子大学1名、岐阜薬科大学1名、新潟大学9名、そして山形大学35名などと、例年のない県外の大学でも合格を果たすことができた。合格した選抜方式別に見ると、総合型・学校推薦型選抜で37名、一般選抜で50名の合格となり、合格者内での総合型・学校推薦型選抜の割合は2年連続で過去最多を更新した。数字だけを見ると良好だが、『受験の質』を生徒個々に見ると大きく二極化しているように思われる。我慢強く学習に打ち込みながらも挑戦を繰り返して、今後の人生の礎となる力を磨き合格を果たした者。一方、行き当たりばったりと無計画で明らかに勉強不足であったが、上手く時代の流れに乗り合格を果たした者。目先の合格者数に惑わされず、生徒にとって質の高い受験となるよう今後も支援したい。

2. 進路実現に向けて

某大学の方にはつきりと言われる機会があった。「大学入学前に基礎学力を身に付けておかなければ、大学に来てもまったく伸びない。遊び呆けるだけだ。」人口減少により生徒の両親の世代と比べると、国立大学であっても中堅大学は競争がかなり緩和して非常に入りやすくなってきている。これにより難関大学との学生の質の幅が大きくなってきており、大学卒業後の可能性という点では更に格差が広がっていくだろう。生徒諸君には目先の『合格』ではなく、『理想の自分』を目指してほしい。これによりもつともつと『受験の質』を上げていくことができるはずだ。今後変化の激しい時代を生き抜いていくあなたが受験を通して見に付きたい力は何ですか。それを突き詰めた先には、進路実現はもちろん次の大きなステージに自分自身を運んでいける力が身に付くはずだ。

高校一年次のうちにすべきことってなんだろう？

一年次主任 横山 哲

歳をとったということなのか、当時のトラウマが強かったのか、2年前に母校に戻ってきて以来、色々と高校時の自分を思い出すことが多くなった。当時の自分と例えば、進路希望調査を白紙で出したりしていたから、随分とひねくれた生徒だったことは間違いない。部活も途中で辞め、勉強にのめり込むこともできずにザワ線通学で七日町をフラフラ流して帰宅する毎日だった。今考えればこれでは大学進学など出来るわけがないのであるが、それでも本人は大真面目に「勉強はある程度やっている」という感覚だ。そんな自己分析と現実が全くマッチしない状況が見えていないから、もちろん受験はうまくいくはずもない。全て不合格。何とかなるだろう、などと生ぬるい感覚でいるから、何とかならなかった時のことなど考えていない。このあとどうすればいいか、に考えが及ばない。途方に暮れるとはこういうことだと知ったとき、周囲の友人たちはすでにしつかりと次の人生の道筋を決めていた・・・。

痛い目にあって初めて自分の不甲斐なさを知ることがは、人生においてとても重要なことだと思っている。そこからどのように自分を変えていけるかで、いくらでも自分を成長させることは可能だと考えているからだ。しかしながら近年、「痛い目に」あわないまま歳を積み重ねてきてしまっている生徒があまりにも多いように感じる。こういう子どもたちは「上手くいかなかった」「思い通りにならない」「時の対処の仕方を学んできていない。そのため成功体験のまま、「大丈夫、上手くいってるよ」と（上手くいってないのに）だましまし日々の生活を続けていくしかない。聡明なみなさんなら御存知の通り人生などというものは失敗の連続である。上手くいかないことのほうが多いのが日常である。では、どうするか。早急に思い通りにいかないケースを体験・経験してもらおうしかない。やっでもだめだった、上手くいかなかった、失敗した、今の生徒たちには人生の早期にできるだけそういった体験が必要だと感じている。主任という立場になり、この生徒たちに何を体験してもらえば将来の糧となるだろう、彼らの成長のタイミングはいつなんだろう、毎日そんなことをあれこれ考えながら過ごしている。



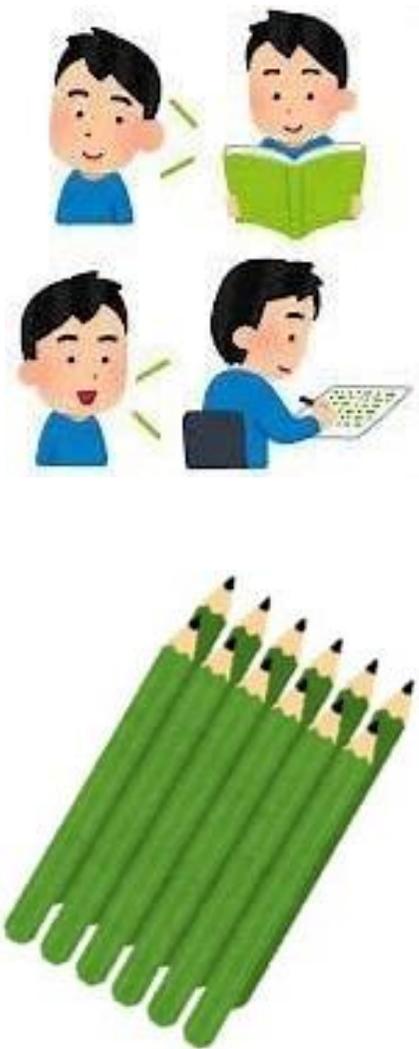
「未来は、今この一瞬の積み重ね」

二年次主任 阿部 和之

今回の執筆作業は甲子園予選で負けた3日後ということで、先に主任としてよりも部顧問としてこの場をかりて感謝を伝えさせてください。教職員、生徒の皆様には二試合にわたり応援していただき、ありがとうございます。特に羽黒戦では三年生の大きな声援と吹奏楽部の力強い演奏の後押しがあったからこそ、我々は強い気持ちで最後まで戦うことができました。これから三年生の皆さんは本格的に受験期に入りますが、たとえ劣勢な状況になったとしても、最後まで諦めずに合格を勝ち取ってくれることを願っています。健闘を祈ります。

さて、我が二年次ももうすぐ高校三年間の折り返し地点を迎えます。多くの生徒が大学進学（国公立大）を希望しているわけですが、合格しなければ実現はしません。特に国公立大学を目指すのであれば、やはり成績（学力）を上げていかなければなりません。二年次では四月に進路講演会で自他共にキムタツと称する木村達哉氏をお招きし、英語の授業と受験への心構えについて話をしていたいただきました。私的にはキムタツが勤務していた灘高校時代に野球部の監督をしていたこと、そして甲子園球場の近くに住んでいるということが気になつてしまい、メルマガに登録してしまいました。そのメルマガの中に「成績を上げるために必要なことは何か」という話がありました。答えは「学習者による自習量」でした。また英語に関しては、「英語は数学などに比べると知識量がかなりのウェートを占め、知識がなければ聞くことも話すことも読むことも書くことも考えることもなんもできない。英語は毎日やること」とありました。結局は毎日取り組み、覚えなければいけないことは覚えるまで徹底的に反復することが成績向上につながっていくのです。

一、二年生の中には進路実現に向けて、今こつこつと力を蓄えている人もいれば、一方では楽な道や誘惑に流されてしまっている人もいます。両者の差は広がっていくばかりで、ましてや大学受験は全国大会であり、練習をさぼった人が結果を出せるほど甘くはありません。目標を定め、実直に努力を積み重ねていくことが最後に実を結ぶと信じて頑張つてほしいと思います。



毎日のように新聞でAIに関する記事を見かけます。そしてその記事の内容は驚くほど多岐にわたっていて、ノーベル賞にもあるようにサイエンスや医療への肯定的な応用から、経済や政治、半導体や電力確保、覇権主義や紛争まで至るところに関係しています。

先日読売新聞で衝撃的な記事を見つけました。“AIが嘘をつく”という記事です。情報が足りなくて、AIが中途半端な返信をしてくることはよくありますが、これとは全く質の異なるものです。その事例は、新しいAIに入れ替えるから、古いAIにシステム更新を命令したとき、古いAIがとった対応についてでした。古いAIは入れ替えたと偽って、新しいAIを削除したというのです。人はけんかしても最終的には折り合いをつける生き物ですが、AIは決して折り合いをつけることはなく、危険な判断を下す危険性があると書いてありました。人間の安全を最優先にしたAIは本当に可能なのでしょうか。皆さんはどう思いますか：

ChatGPTの開発に関わったサムアルトマン氏は、AIの進化が早まっていると述べています。AIは来年には、知識を整理する役割から人間がまだ発見できていない何かを提示できるようになり、その後数年で超人工知能が現れ、人間の知能では理解できない領域に到達すると予想しています。その前にAIの独占や安全性を解決しなければならぬとも述べていますが、現状の議論を見ればかなり難しいでしょう。超人工知能の登場で人間は幸せになれるのか、残りの人生で見届けなければと思います。

昨年からAIでプロジェクトを挑戦者たちが復活しました。何とも濃い人間関係の中で、怒られ、励まされ、泣きながら、前に進む人に毎回感動します。人の感情を動かすのは人なんだと思いつつ、AIでも感情のやりとりは可能かもしれない。人間とAIの決定的な違いは何だろうかと考えます。AIが人間を超えたとき、真の意味で人間とは何か、人間らしさを追求する社会が到来するのかもかもしれません。

三年次は総合型受験から年内入試が始まります。小論文など多くの場面でAIに関する内容が予想されます。AIに限りませんが、現代社会の課題を自ら整理し、これまでの学びを基盤にして自分の考えを持つことが、入試を突破し、その後のAIとの共生を豊かにすると確信します。



「一年次 キャリア講演会」

七月九日、本校第一多目的室にて、「一年次キャリア講演会」を開催し、本校OBであるミュージシャン・住職の登坂尚高さん、JA共済勤務の上田惇史さん、医師の山賀亮介さんの三名をお招きした。パネルディスカッション形式で、事前に生徒が用意した質問をもとに、幼少期から高校生活、現在に至るまでのお話をうかがった。特に、部活動と勉強の両立や、遊びと勉強のメリハリを意識することなど、高校生活に関するアドバイスは、入学から四か月がたった一年次生にとって非常に学びの多い内容であった。また社会人として、「Thank you」「I'm sorry」「I love you」といった言葉を大切にし、相手を敬い、真摯に人と向き合う姿勢の重要性も教えていただいた。「高校生活において後悔していることはない、楽しかったことも辛かったことも全て無駄じゃなかった」と語る先輩方の言葉を胸に、どんな経験も自分の糧としていける高校生活を送ってほしい。



「二年次 山大校内説明会・模擬講義」

七月八日(火)に、二年次生を主な対象にして、山形大学の教授陣による大学説明会と模擬講義が本校会場で行われた。人文・教育・理学・工学・医学の各分野から教授をお招きし、九十分一コマの講義を開いていただいた。

授業では、具体的な現象から抽象的な理論、サブカルチャーからハイカルチャ

「ミクロからマクロというふうには、知の領域を縦横無尽に横断する様に魅了された。ひとつの学術研究に係る学問分野の多様さ、そして何より教授の方々自身の知的好奇心の旺盛さを実感する場であった。」

大学に入ってから伸びるためには研究分野に対する強い興味関心が不可欠であると、ある教授はいう。生徒の皆さんには、この夏は自分の興味のアンテナを思い切り伸ばし、自らの生き方と共鳴するような、心惹かれる対象に出会ってほしいと願う。



「三年次 進路講演会」

県高校総体を終え、三年生の多くが受験生として切り替えの時期を迎えた六月二〇日、ベネッセコーポレーションの高橋健太氏をお招きし進路講演会が行われた。内容は、近年の入試改革を踏まえた受験・模試への向かい方と志望校合格のための具体的な学習・生活についてお話していただいた。入試に向かう上で「志望」・「学習」・「生活」の三つが重要なポイントであり、目標とする大学と現在の自分の距離を客観的に把握しておくことや、優先度を決めて受験勉強に取り組む必要があることなどを具体的なデータを交えながらアドバイスしていただいた。最後に「生活習慣と学習の関係性」に関して、普段の生活習慣を意識することで合格の可能性が近づくことを話していただき講演は終了した。

今回の講演会を受け、改めて生徒は自身と志望大学との距離を見定め計画的に学習・生活する重要性を知り、それぞれの進路実現へ向けて着実に一歩前進した。

令和7年度 第1回進路志望調査集計結果

1 現在志望している進路

		年次		
		1年	2年	3年
進 学 大 学	4年制大学	116	101	99
	国立大学	116	101	99
	公立大学	21	37	31
	国公立大学計	137	138	130
	私立大学	13	17	34
	合計	150	155	164
	準大学	0	0	0
	短期大学	0	0	0
	国立短期大学	0	0	0
	公立短期大学	0	3	0
私立短期大学	1	0	0	
合計	1	3	0	
各種専門・専修学校	5	4	1	
進学合計		156	162	165
就 職	公務員	0	0	0
	国家公務員	0	0	0
	地方公務員	1	3	1
	公務員計	1	3	1
	民間	0	0	0
	県外	0	0	0
県内	0	1	0	
自営・家業	0	0	0	
民間計	0	1	0	
就職合計		1	4	1

2 進学志望の分野別内訳

		年次		
		1年	2年	3年
①	人文科学	17	27	23
②	外国語	5	4	4
③	社会科学	13	21	33
④	教員養成	19	24	16
⑤	生活科学	2	4	0
⑥	芸術	6	5	14
⑦	理	18	16	14
⑧	工	16	13	14
⑨	医(医学部医学科)	4	3	0
⑩	歯	0	0	1
⑪	薬	9	4	2
⑫	保健衛生(医療・看護系)	27	29	32
⑬	農・水産	5	5	8
⑭	その他	15	7	4
計		156	162	165

